

# 「伝統的な素材を 今の暮らしに生かしたい」

「これからは畳の機能に  
感覚をプラスする時代です。」

ぴーぷる



オクダ有代表取締役  
奥田拓男さん



’88くらしの工芸展グランプリ受賞作品  
「イ草猫伏素足マット」

日本文化を語る時に忘れてならないのが畳の存在だ。日本独自の精神、伝統文化の基礎を築いてきたのは、まさに「畳」なのだ。しかし、生活の洋式化に伴いここ数年需要が落ちこみ、畳業界にかけりが見え始めている。そんな中、五百年に近いイ草栽培を誇る八代から新たな動きが起こってきた。

八代市内でイ草製品、畳製造会社を営む奥田拓男さんが、そのニューウェーブの仕掛人だ。イ草農家の二男。一度は会社勤めをしたもののイ草を生かす道を探して脱サラ。岡山のイ草問屋での修業の後、二十年程前郷里八代に帰



って独立。以来良質のイ草の生産から製品の開発まで精力的な取り組みを続けている。

その努力の結晶が、’88くらしの工芸展（県伝統工芸館・熊本日日新聞社共催）でグランプリを獲得した。受賞作は、イ草を編んでアクセントラグ風に仕上げた「イ草猫伏素足マット」。洋風の暮らしにもすんなりと溶け込むアイデア商品である。

「伝統的な素材であるイ草を、暮らしの中にどうマッチさせるかが自分の仕事の基本的テーマ。伝統の良さがかえってモダンなものとして今の時代に認識されたのでしょ。イ草も麻や綿と同じ天然素材の一つだという発想からスタートした快挙である。

「クロスやカーテン、じゅうたんがこれまで多様化してきたというのに、畳だけがいつまでたっても従来通りではいけないんじゃないか。他のものと同じようにインテリアの一部と考え、カラーコーディネートのできるものにしてほしいのではないか」というわけで、一見奇抜とも思える黒や赤の畳も生まれた。

「畳の機能があまりにも素晴らしいた

限りなく広がる畳の未来を夢見て、奥田さんは自身の創作畳に「夢たたみ」と名付けている。



め、畳業界はこれまで畳の力におんぶされてきたんですね。けれども、今は機能プラス感覚の時代。生産者は消費者のニーズに応えるだけのノウハウを持ち、産地も生産するだけでなく情報発信基地としての役割を果たさなければこれからは生き残れません。そのためには異業種との交流や勉強会を行い、日本全国、ひいては世界にも目を向ける必要があると思います。」と奥田さん。

この夏、カリフォルニア州サクラメント市で開かれた産業博覧会に自作の「夢の畳」を出品し、確かな手応えを感じたという。「アメリカではまず寿司がブームになり、今は、ふとんや風呂が流行っている。ならば次にくるのは畳でしょう。実際、彼らは靴を脱いで寝ころがってくつろげる畳に非常に興味を示しています。やり方次第では市場は海外へもどんどん広がっていくはずですよ。」

伝統を守りつつ日常生活の道具としてふんだんに使われなければ産業としては成立しない。文化財になってしまつてはダメだというのが奥田さんの持論。そのためにも従来の熱風乾燥から省エネ、公害防止、イ草の傷みを減らす冷風乾燥を取り入れるなど研究、努力を怠らない。そしてイ草産業の新しい試みを成功させ、次代へ伝えるべきものを創りあげようと、多くのイ草農家に呼びかけている。

「農業は二次産業にまで入り込める可能性を持っています。何もせずにジリ貧を待つよりは失敗してもやった方がいいじゃないですか。」と、エネルギーシユに語る表情に、「畳」への熱い思いが伝わってくる。